

国外実態調査報告書

テーマ : 日本と韓国の卸売市場の違いと卸売市場法人と市場卸売人の違いについて
ゼミ名 : 木立 真直 ゼミ
調査日 : 2025年8月5日(火)~2025年8月8日(金)
調査先 : 【大韓民国】江西農水産物卸売市場
授業科目名 : 課題演習Ⅰ、演習Ⅲ
参加学生数 : 7名(2年生)、2名(4年生)

1. 調査の趣旨(目的)

韓国・江西農水産物卸売市場の組織構造、取引形態、物流の特性および運営上の課題を明確にすることを目的とする。

2. 調査結果

まず基礎知識として、韓国には全国で32の公設卸売市場が存在し、その一つである江西農水産物卸売市場は首都圏西部の重要な流通拠点として2004年に開場した。この市場には卸売法人3社と市場卸売人60社(青果30社、果実30社)が入居していることを確認した。

施設面積に関しては、卸売法人が約6万4,000㎡、市場卸売人が約4万㎡を使用しており、卸売法人の方が広い面積を占有している。しかし、売上比率では市場卸売人が全体の60%、卸売法人が40%を占めている。この差異は、取引形態の違いと深く関係している。

取引形態には大きな相違があり、卸売法人は需要と供給に応じて価格が変動する競り方式を採用しているのに対し、市場卸売人は販売数量と仕入価格を事前に設定し、安定価格で取引を行っている。そのため、価格変動が少なく安定的な取引が可能であり、市場卸売人との取引を好む出荷者や買受人が多い。

市場は都市部に立地しているため配送が容易であり、流通コストを削減できる利点がある。また、鮮度が低下した野菜はキムチ原料として再利用され、食品廃棄物の削減にも寄与している。

開場の目的は、出荷者に対してより広い出荷選択肢を提供するため、競り制と市場卸売人制を導入することであった。市場卸売人制の導入過程では、世界的に市場卸売人制が普及していることから、その流れに合わせて流通コスト削減を図るため、政府主導で韓国にも市場卸売人制が導入された。その結果、市場は二重構造となった。しかし、この構造が需給の不一致を招き、円滑な取引を妨げる場合もある。

江西農水産物卸売市場は都市型市場としての立地優位性を活かしつつ、組織構造の再検討によって、さらなる効率的な運営が求められている。

今回の調査を通じて、卸売市場の効率性と安定性は単に施設規模や取引量によって判断されるものではなく、取引方式や市場構造によって大きく左右されることを実感した。

また、価格の安定、需給調整、流通コスト削減、食品ロス対策といった多面的な観点から市場運営を評価する必要があることを学んだ。

この学びをさらに深めるために、日本の卸売市場の仕組みについても調査を行い、実際に現地調査を進めることで、韓国の卸売市場との相違点や共通点、さらに卸売市場を運営する上で重要な要素を明らかにしていきたいと考える。

最後に、ご多忙の中、会社の皆様には、市場について詳細なご説明をいただき、また私たちの質問にも誠実にご対応頂いたことに心より感謝申し上げます。学生である私たちにとって非常に有意義で貴重な経験となった。今回の経験を糧として、今後も一層研鑽を積んでいきたい。

ありがとうございました。



写真 会社でのご説明の様子



写真 スーパーの青果物売場

(文責 : 藤井 夏紀)